

迷走地図増刊号

2016年12月1日

身近のライバル

村上 豊

…夏生まれの海南島…

兄達や従兄弟が、愚生を評価する言葉で、なるほど兄達は一月生まれが二人、二月生まれが一人と男ばかりの四人兄弟、もっとも三兄とは六歳（学齢は七歳）違いで、宿題は全部みてくれる大好きなアニキで、三兄が小学一年の時に愚生が呱呱の声を上げ三兄は（中国では長男を伯、次男を仲三男を叔、四男を季とよぶそうですが）ポロポロ泣いて

「オレ、ニィちゃんになったんだね」

と喜んだそうで、おやつなんかも「アーンしろ」と一口齧らせてくれました。

いつの頃か、一つ思い出があります。

叔兄がぴったり横に坐っている愚生の頭を軽くゲンコツを喰らわして

「コイツはオレのこと甘くみてさ」

愚生は叔兄の頬をぺろりと舐めて

「ニィチャン甘くないよショッパイよ」

兄たちは

「バカだなァコイツは」

「夏生まれの海南島だからナ」

戦争が無ければ叔兄も夭折しなかったろうにと口惜しい思いをしています。

あの戦争は何も彼も滅茶苦茶に壊しましたが、その挙句戦争体験者（高齢者）と、戦争を知らない層と平和願望をわけました。

戦中戦後のあの苦しみを知らぬ派は、年長者の蟠踞はさぞ目障りなことでしょう。

兄弟^{はらから}のことばすくなくむかひをる夜の時雨のふる音ひくし 岡 麓

ビルの角まで出でて別れぬ弟はスクーターにて走り去りたり 吉野 昌夫

遺されし一人の姉の多愛なく老い呆けゆくを幸せとせむ 大屋 正吉

いまは餡ぬき饅頭のように伯と季が元気でいますが殆ど往来はありません。

岡麓詠のように遭っても語りあうものがないのです。これが姉と弟であればまた別と思うのですが……

小池光著『現代歌まくら』

弟は枕を噛みて耐へゐたり弟といふは兄より深き 岡井 隆

(略) 兄弟の歌は、存外少ない。でも捜していくと屈折をふくんだいい歌がある。とくに弟を歌った歌。兄にとっては人生で直面する最初のライバルが弟だ。(略)

少年時代を回顧した歌にたびたび弟が登場する。叱られたりするとすぐ泣きわめいたじぶん。しかし弟は、枕を噛んでグッところえていた。あのころから弟にはかなわなかったという感慨は、ある年齢に達してはじめて言い得る肉親の情である。

新しき仏壇買ひに行きしまま行方不明のおとうとと鳥 寺山 修司

寺山修司に弟はいない。この弟はだからフィクション。おもくるしい<家>のしがらみ、その重圧を担うのは兄である。弟は鳥のように自由だ。仏壇買いにいったきり、行方も知れない。架空の弟に託して、共同体の暗い呪縛を歌う。

暗い呪縛か何か知れないが、仲兄は拗けていた。伯兄、叔兄は専門学校へ進学したが、自分は肺浸潤で中学中退、(当時この病気は国民病だった。)高熱に効くといわれた仙人掌、父の趣味で沢山収集したのを全部食べたのに、「オレだけ学校を出されなかった」両親は黙して語らず。学校を出されなかったのは末っ子だって経済的に無理で進学不能。

「お前は頭が悪くて、上の学校にやっても無駄だから」オヤジよく言うよ。

とびら 未開扉の向う

結社誌『橄欖』から

昨日の昼庭掃きてゐし隣家のひとその夜にみまかりしとふ 牧野 恭子

わづらはず逝きしと聞くは羨しかり悼む心もあはあはとして

現在高齢者の層が部厚くなっている。愚生もその仲間で層の厚みは脹らむばかりだ。

めでたし めでたし。だが該当者としては抄出詠のように誰の迷惑にもなりたくないという願望も生ずるか。

ある文庫本の解説を影山民夫氏が書いているが「現に僕の妻の祖母にあたる人なぞ、九十九歳で今年の夏に身罷ったのだけれど、その数年前までは自分の足で停留所まで歩いて電車に乗り温泉通いをしていた。(略)

最後の日も昼食をちゃんと食べ、食後に義母と会話していて、ふと言葉が途切れたなど思ったらしんでいた。こういう人もいるのである。」

「こういう人」でない例

百歳は大往生と分かるけど泣く人いない通夜は悲しい 小島 敦

これは朝日新聞歌壇入選の一首。泣く人が居ないということは親族のない孤独な人か。

民放のニュースで某寺の特集をしていたが毎日宅配が届く。中味はお骨。全国どこでも墓地は高額なためその寺で供養することにした。それが口コミで伝わったとか。

鬼籍に移る時に涙したかしれぬが、後あとを考えれば、そこはドライになるのでは。

老いぬればどうやらぼんくらがよろしらし余りさゆると己傷つく梅本千代子

結社誌橄欖から、この歌人はめでたく白寿を修めて帰らぬ旅に立たれたが、この明るさは涙は必要としない。ぼんくらがいいと。

少し以前は、喪中の家の方向を指す矢印の看板が立ったものだが、現在は見ない。

知人の他界を知らずにみて、後日慌てて何うと、香典泥棒や空き巣狙いの防止のために立て看板は出さなくなったとか。

世知辛い「この世」のおかげで、恥のかきどうし、鉄面皮にされている。

なにせ災害で避難すると、空巣コソ泥が大手を振って罷り通る時代だ。

小高賢著『老いの歌』に「四つめの発見」として 二十世紀には三つの発見があったという。

それは「無意識」「未開」「子ども」という領域である。以前はどれもそれらと同じように、二十世紀後半から浮上してきた未知の広大な領野かもしれない。「略」「老い」という時間をいままで経験していないからだ。「略」

確かに人はそれぞれの四つ目の発見である「老い」を体験しつつ生きていかなければいけない。今日のわれは明日は「？」だから。

友は詠う。

切り戻し二度目の花を開くあり人にはなきかかかるマジック 鈴木 禮子

花とともにわが再生の時よあれ夢なれどふと夢に溺るる

再生なのだ。

まさに夢なのだが、再生して短歌にならなかった言葉をかき集めてかためたい。

雪降ればこの世の裏の白絹に古世の梅のくれなゐが咲く 安永 露子

のやうなかたちに。

老いは花満開の季節

永六輔『男のおばあさん』は女性の方が男性より長生きしている。だから「おじいさんは年のとり方をおばあさんに見習う」と。

読んでからベンチや椅子に腰かけることにした。大型スーパーやバス停のベンチは老婦人達が占領している。それに交じるのはまだ度胸がないので珈琲店などで。

ここまで長生きしたのだから「もっと」と欲が出て老婦人達を見習うことにした。

永氏がおばあさんをしている面白いところがある。道の向う側に瀬戸内寂聴さんが居て「永ちゃんいくつになったの」

真ん中をデモ行進の列が通っていて、両方の通訳をデモ隊の人たちが口伝えに知らせてくれる。どちらも車椅子利用者だから子供目線、

「七十九です」。頭の上方で

「七十九です」「七十九です」……

場面を思い浮かべるとシュプレヒコールの間に「いくつになったの」が入るのだから頬がゆるむ。

アルツハイマーはドイツの、メニエールはフランスの、パーキンソンはイギリスの、病気を発見した医師の名前だとか。そういえばそれぞれに「氏」がついていたような気がするが、老化といってもいろいろあるらしい。

永氏の本に「年はとってみないと、わからない」という章がある。これは事実で、一緒に歩いた仲間で、同齢の知人がよちよち「赤ちゃん歩き」になっていた。つい最近まではしっかりした足取りだったのに。

『短歌研究』2016年五月号に

悪口は誹謗はそして炎上はしかし無視よりいい蒼穹だ 岡井 隆

悪口、誹謗などしなかったが、憎しみを受けた。愚生が今なおちゃんと歩けるのが（あいつ同年なのに）ということらしい。

年をとらなければあわない憎しみで、現在は「やあ」「やあ」と手も上げない。無視よりいいと岡井氏の詠うような蒼穹にはなれない。気分は

追う意識もとよりあらず追われぬ意識もうすれ老いふかまれる 岩田 正
か。嫉妬や憎しみを抱く知人の方が若い。

生活費ろくに稼げぬまま老いし稚拙なうたびとわれに乾杯 岩田 正
愚生も何となく無事に年よりになってゆく自分に乾杯。だ。

大盛りのスパゲッティを食い余す大学構内軽食の店 清水 房雄
学食の大盛りは凄い量だろう。百一歳の清水氏が食べてみようと思った
遊心は笑いを誘う。「食い余」したのだからフォークはつけたのだ。普通
通は見ただけで御免だ。

鶏に鶏冠馬に鬣ありて男威を張るまことあはれなりけれ 岩田 正
おじいさんは粗大ゴミなことは自分でも理解できる。そこで「男のおばあさん」だが

バスを待つ長い行列の横から真っ先に乗り込む。これは出来ない。岩田氏の歌のように、男威を張るが見栄も張る。それならおばあさんに注意をするか。しない。心裡でブツブツ思うだけ。おばあさんが長生きするわけだ。

三人でタクシーに乗った。年齢からいっても助手席は愚生だが、頭をゴン。痛かったけど何でもないフリを。降りたとき料金を払ったが、後ろの連中は薩摩の守を決め込もうとする。強引に割勘にした。男のおばあさんだ。

男の年寄りはこの時が狡いのだ。

七十から人間は花開くなりとたまさか聞きてわれもたのもし 野村 清